

ワーズワースの自然の概念

——ユートピアからエコロジーへ——

薬師川 虹 一

I

W・ワーズワース (William Wordsworth 1770-1850) がその最も優れた詩のなかで自然を讃えたあの熱烈さは当時の社会的、宗教的大変動によって動転させられていた読者の精神を慰め、安心させることができたこととM・アーノルド (Matthew Arnold 1822-88) が主張したのを受けて、自然はワーズワースにとって「当時の科学が示した最悪の状況に対する解毒剤」¹ となったとJ・ウィリアムス (John Williams) は言う。確かに「自然」という概念は「科学」と対立するものとして位置付けられてきたことは、「自然状態」を「万人の万人にたいする戦争状態」² と考えたホブス (Thomas Hobbes 1588-1679) の考えや、人間の状態を「自然の状態」「戦争の状態」そして「社会の状態」の三つに分け、「自然の状態」を理想の状態としながらも、その実現不可能なことを知るJ・ロック (John Locke 1632-1704) が「戦争の状態」を避けるために求めたのが「自然の状態」ではなく、「社会の状態」であった³ ことを見る迄もなく明らかである。その頃自然状態は混乱と無秩序の代名詞であり、それを救うのは科学的、合理的社会の確立と思われていた。

一七世紀後半に活躍したイギリス経験論哲学者たちにとって、自然はまだ人間に救いをもたらしてくれるものとはなっていなかったと言えるだろう。勿論自然のなかに神の声を神託として聞こうとした古代ギリシャの人々以来、自然は人間にとって常に偉大な存在であり、姿であった。自然と科学の対立関係が逆転するようになったのは、一八世紀後半、産業革命の時代即ち機械文明の時代が始まり、フランスでJ. J. ルソーが出てからのことであろう。J・プリーストリー (Joseph Priestley 1733-1804) が「物質と精神」⁴ を書いたとき唯物論的科学主義の弊害を彼は最も憂っていたのであった。S・T・コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge 1772-1834) が宗教的政治論を基本として、『教会と国家』を理想国家論として著したのも、科学的物質主義に流されている当時のイギリス文化の未来を憂いてのことであった。

一八世紀初頭「四季の詩」(*The Seasons*) (一七三〇) を著したJ・トムソン (James Thomson 1700-48) はその序文に、

「この素晴らしく栄光に満ちた自然の光景を観察すれば、創造主の無限の力と叡知とが、実に明らかに判るではないか。人間は神に愛でられる身でありながら、理性などというものによって、どうして不平の声を上げることが出来よう。・・・我々に必要なことは、

ひたすら目をあけて我々の周囲の全てのもののなかに神を見ることである。」⁵
 と書いたが、これはルネサンスの子供F・ベイコン (Francis Bacon 1561-1626) が「自然を
 観照することによって、神の神秘に到達しようと、あえて望んで はならない」⁶ と言ったとき
 からほぼ一世紀後であったことを思うと、理性と科学に目覚めたルネサンスの人々が、再び宗
 教に回帰するのに僅か一世紀しか懸からなかったことが判るではないか。人間を中心に据えた
 ルネサンスは、しかし、神の栄光を見上げるトムソンと時代を共有しながらベイコンの流れの
 中に生きて

人間は不完全で、神は誤っていると言うのはやめるが良い。

むしろ人間は人間なりに完全だと言うが良い

彼の知識は彼の状態と位置とに相応しく

彼の「時」は一瞬で 彼の「空間」は一点なのだ

もしある領域で完全であるなら

早かろうと遅かろうと 現世来世は問題ではない

今日幸福なものは千年以前の者と同じく完全に幸福なのだ

(「人間論」書簡 巻・二)⁷

と唄ったA・ポープ (Alexander Pope 1688-1744) は「したがって汝自身を知るが良い 神の
 謎を解くなどと思い上がるな 人間の正しい研究題目は人間である」「神になろうとした天使
 は落ちたが/天使になろうとする人間は謀反を起こす」と忠告するのであった。ここには人間
 のアイデンティティーに対する一片の不安もない。ここには傲慢なほど確固とした人間に対す
 る自信がある。一方トムソンの世界には、不完全な被造物としての人間の不安が神への純情な
 憧れとなって漂っている。トムソンの自然観とポープ的人間観との綾織りのなかからロマン派
 の世界が開けてくるのであるが、十八世紀後半から始まる産業革命のなかでは、トムソンの純
 情は消えて、不安のみが鮮烈に姿を現すことになる。科学的技術社会という姿を取って現われ
 る「理性」は、もはやルネサンス時代の輝きを失って、近代人の不安と、社会的危機感の根源
 と見られるようになった。「ワーズワースを中心とするロマン派の運動は我々の共通した文化
 的生活を維持して行くための能力に対する自信の危機を表現しているだけでなく、この自信の
 危機が十八世紀の議論に始まっていることをも表現しているのである」⁸ と見るのが今日の通
 念となっている。そしてワーズワースの抱えた危機感「我々の時代の民族的、文化的、政治
 的危機感となって続いているのだ」⁹ とする理解は正しいものといわねばならない。

だが考えてみれば、太古から自然は常に人々と伴にあり、人々は常に自然から生きる道を教
 わってきたのである。

例えば作者不詳、創作の年次も判らぬ伝承童謡の中でもこのことは明らかであろう。身近な
 自然現象として天候に係わる童謡を一つ二つ見てみよう。

The south wind brings wet weather,
 The north wind wet and cold together;
 The west wind always brings us rain,
 The east wind blows it back again.

When clouds are upon the hills,
 They'll come down by the mills.

雷の嵐に出会ったときの心得も童謡に唄われる。

Beware of an oak,
 It draws the stroke.
 Avoid an ash,
 It courts the flash.
 Creep under the thorn,
 It will save you from harm.

畑仕事も自然の移り変りに導かれていた。

When elm leaves are as big as farden,
 You may plant your kidney beans in the garden;
 When elm leaves are as big as shilling,
 It's time to plant kidney beans if you're willing;
 When elm leaves are as big as penny,
 You must plant kidney beans--if you mean to have any!

子供達にとって自然は常に身近なものであった。これらの童謡は私達が子供であった頃、下駄を蹴り上げて明日の天気を占っていたのを思い出させるではないか。明日の天気は子供の下駄と伴にあったのだ。それが気象観測の人工衛星が打ち上げられ、レーダーで伝えられた天気図がテレビの画面に映しだされるようになると、子供の下駄も無くなり、こういう童謡も何時とはなく忘れ去られ、天候の変化や季節の移り変わりもコンピューターの世界のものとなってしまっている。自然とは何であったのか、作者不詳の伝承童謡ではなく、政治や社会の諸問題にも深く係わり、強烈な個性を持っていた近代の詩人の作品のなかで、自然というものが、我々人間たちにとって持つ意味を改めて考えてみるのが本稿の目的である。

II

イギリス・ロマン派の詩人たちは多かれ少なかれ、自然を見詰めて唄ってきたといえる。たとえその自然が *natura naturata* (被生成的自然 *natured nature*) であれ、*natura naturans* (生成的自然 *naturing nature*) であれ、詩人の前には常に自然があり、詩人は自然を教師として唄ってきたのである。中でも一番自然と密着していた詩人として、ワーズワースの場合を考えてみることにしよう。確かにワーズワースほど土地と自然とに密着していた詩人はロマン派詩人たちのなかにも見られないかもしれない。「場所」(place) と「疎外」(displacement) の意識が彼の世界のキー・ワードであると言えよう。

The Tables Turned

Up! Up! my Friend, and quit your books;
Or surely you'll grow double:
Up! Up! my Friend, and clear your looks;
Why all this toil and trouble?

The sun, above the mountain's head,
A freshening lustre mellow
Through all the long green fields has spread,
His first sweet evening yellow.

Books! 'tis a dull and endless strife:
Come, hear the woodland linnet,
How sweet his music! on my life,
There's more of wisdom in it.

And hark! how blithe the throstle sings!
He, too, is no mean preacher:
Come forth into the light of things,
Let Nature be your Teacher.

She has a world of ready wealth,
Our minds and hearts to bless--

Spontaneous wisdom breathed by health,
Truth breathed by cheerfulness.

One impulse from a vernal wood
May teach you more of man,
Of moral evil and of good,
Than all the sages can.

Sweet is the lore which Nature brings;
Our meddling intellect
Mis-shapes the beautiful forms of things:--
We murder to dissect.

Enough of Science and of Art;
Close up those barren leaves;
Come forth, and bring with you a heart
That watches and receives.

この詩ほど自然詩人としてのワーズワースを示しているものはないだろう。文字どおりの意味を辿っていけば、ここには彼のカノンが確固としたかたちで表明されている。「自然を君の教師とせよ」とか、「人間の小賢しい知性が 物本来の美しい形を汚しているのだ」とか「人間はなんでもばらして殺しているのだ」とか「科学や技術はもう沢山だ」と言った言葉のなかには自信に充ち溢れた詩人がいる。ここには「疎外」(displacement)の不安はない。だが、たしかにS. ギル (Stephen Gill) の言うように「ワーズワースは単なる底抜けの楽天主義を表現しているのではない。見詰め、受け止めるその心は、人間の命の変らぬ状況が苦しみであるということの証明をあらゆる場面で見出だしているのである。」¹⁰ 太陽は山の端に懸かり、辺りにをすでに橙色に変えた最初の夕日の光が輝いているのである。夕日は間もなく夜の闇を導くであろう。白日の昼間から暗い夜に変わるしばしの間の橙色に輝く夕べの一瞬はトマス・グレイ (Thomas Gray 1716-71) のエレジー (“Elegy written in a Country Church Yard”) の冒頭を思い出させ、詩人のなかに漲ると見えた自信は、はかなくも明るい夕べのように、たちまち夜の闇に閉ざされることを予感させるのである。自然はいつまでも人間の教師となり得るのであるのか、目の前に広がる自然は果たして信ずるに足るものなのだろうか。「科学や技術はもう沢山だ」とはいえ、それでは何を持って詩人はこの不安に立ち向かえば良いのだろうか。

この白々しい自信に替わるものを唄う言葉を詩人は持っていないのだ。「文学的常套手段や既存の構造としての感情を放棄するように追い込まれているワーズワースは、言葉そのものを奪われた詩人となる可能性に直面している」¹¹ と言うウイリアムスの言葉は正しい。トムソンにとって目の前の自然は神の栄光を示してくれる確かなものであった。いま、ワーズワースにとって目の前の自然がトムソンの自然ではありえないにもかかわらず、目の前の自然以外に頼る物がないとすれば、自然をユートピアとしてみる以外の見方を模索しなければならない。眞に「形勢は逆転」(“The Tables Turned”) しなければならないのであった。伝承童謡に見られるような人間と自然との幸せな共生はもはや期待すべくもない。楽園を追われたアダムとイヴのように人間は自然から離れてゆく。

Lines written in Early Spring

I heard a thousand blended notes,
While in a grove I sate reclined,
In that sweet mood when pleasant thoughts
Bring sad thoughts to the mind.

To her fair works did nature link
The human soul that through me ran;
And much it grieved my heart to think
What man has made of man.

Through primrose-tufts, in that sweet bower,
The periwinkle trailed its wreathes;
And 'tis my faith that every flower
Enjoys the air it breathes.

The birds around me hopped and played:
Their thoughts I cannot measure,
But the least motion which they made,
It seemed a thrill of pleasure.

The budding twigs spread out their fan,
To catch the breezy air,

And I must think, do all I can,
That there was pleasure there.

If I these thoughts may not prevent,
If such be of my creed the plan,
Have I not reason to lament
What man has made of man?

楽園に憩う「私」の幸せな心に色々な音の交ざり合った調べが物悲しい思いをもたらすのは何故だろう。人間が自分の手で作り出してきたものを思うと「私」の心には悲しみが湧いてくる。What man has made of man. それは必ずしも産業革命の原動力となった機械と、その結果生まれてきた近代社会だけではない。むしろそれは、都会人という新しい人間であり、科学人、理性人とも言える存在のことである。草花は芳しい大気を呼吸しているのに、その同じ大気を呼吸する人間は、なんと変ってしまったことだろう。此処には二重の疎外(displacement)がある。一つは自然の中での位置の喪失であり、一つは、過去の間人からの疎外である。ところが、小鳥たちのちょっとした動きにもぞくぞくするような喜びがあるではないか。無条件に安らぎの中にある小鳥や草花たちに比べて「私」に見られる人間の生きざまはなんと惨めなことか。自然のなかで楽しくくつろいでいても、人間には常に心の隙間風が吹き抜けているのである。“pleasant thoughts/Bring sad thoughts to the mind.” しかしこれは未だしも甘美な悲しみといえよう。この甘美な悲しみに比べて次の詩に見られる老人の姿はどうだろう。

Old Man Travelling

Animal Tranquility and Decay, A Sketch

The little hedge-row birds,
That peck along the road, regard him not.
He travells on, and in his face, his step,
His gait, is one expression; every limb,
His look and bending figure, all bespeak
A man who does not move with pain but moves
With thought--He is insensibly subdued
To settled quiet: he is one by whom
All effort seems forgotten, one to whom
Long patience has such mild composure given,

That patience now doth seem a thing, of which
 He hath no need. He is by nature led
 To peace so perfect, that the young behold
 With envy, what the old man hardly feels.
 --I asked him whither he was bound, and what
 The object of his journey; he replied
 'Sir! I am going many miles to take
 A last leave of my son, a mariner,
 Who from a sea-fight has been brought to Falmouth,
 And there is dying in an hospital.'

此処には一人の旅する老人が描かれている。それは決して“sweet mood”を感じさせる姿ではない。何の苦痛もなく歩む姿は「蛭とりの老人」にも見られる哲人の風格さえ感じられるのである。長い苦しみのもとに到達した柔和さはもはや忍従の苦しみを越えた境地を示している。だがこの老人が「蛭とりの老人」と異なるところは、後者が崖のうえの岩に例えられるのに対して、此れは餌を啄ばむ小鳥もこの老人の近づくのに気づきもしないし、気にもしないほど老人としての存在感、或いは、人間としての存在感が希薄な姿に描かれているところにある。前の詩で「私」は決してこれほど希薄な存在にはなっていない、「もの悲しい想い」を「甘美な気分」のなかで味わいながら、「私」は人間として自然に抱かれている喜びに浸っていた。しかし此処での老人はもはや人間であることを主張すらしていない。此処に描かれる老人は、それはいわば「生きながら死んでいる状態」(Death-in-life)なのである。ワーズワースはそれを“Decay”の姿といい、その生命の気配の無い静寂は人間のものではなく、“animal tranquility”だと見るのである。人間が自然と同化するという事は喜びの極致に到ることではなく、悲しみの極致に到ることなのだということをこの老人の姿は語っているのではないか、或いはニコラス・ロウ (Nicholas Roe) の言うようにこの老人にせよ、蛭取りの老人にせよ、彼らの姿は「生と死の境界を越えたところにある、究極の叡知を備えた」¹² 姿なのではないか。だがそのことをワーズワースはもとより、この老人自身も決して言葉で語ってくれてはいない。それは言葉で語られるようなことではなく姿でしか示され得ないことなのである。ワーズワースの“The Thorn”について語るシェイマス・ヒーニー (Seamus Heaney 1939- : 95年度ノーベル文学賞受賞詩人) の言葉にならって言えば、我々は老人の姿を描く言葉を普通の言葉として読んではならないのである、「自然界に対応する神秘の道、現象を象徴として読む魔法の態度」(“a magical way of responding to the natural world, of reading phenomena as signs”)¹³ で読まねばならないのである。その時老人は「一つの力の場」(“a field of

force”)¹⁴ となっているのだ。ワーズワースが「墓碑銘」にみた言葉の力も同じことなのであった。その時老人は自身の歴史と、病院で瀕死の床にある息子（“Life-in-Death”）の歴史を全て結晶させた姿として我々の前に立つ。それは「生きること」の全てを結晶させた姿である。“Decay”「腐朽」のスケッチのなかにワーズワースはこれだけのことを組み込んでいると読まねばならない。“The Tables Turned”はここでも見られるのであり、ワーズワースの世界は、描かれたものを逆転させたとき初めて正しい姿を見せてくれるのである。

それでは前の作品に見る自然と、老人を飲み込む自然とが同じ自然であるとして、その自然は老人のように逆転しなくても良いのであろうか。ワーズワースは近代人の姿を自然と対立するものとして描き、近代人の苦悩は自然のなかに帰ることによって癒されるように語ってくれる。

自然はかくして

我らのうちなる心に靈感をあたえ
 静寂と美を印して気高い思いを育み
 悪口も軽率な判断も利己人の嘲りも
 真心に欠けた挨拶の言葉も
 日常生活の味気ない交際も
 我らを挫きえず また
 我らの目にする一切は祝福に満つという明るい信念を
 乱し得ないようにするのだ

（「ティンターン寺院上流の詩」より）

確かにワーズワースの詩に唄われる世界で、自然は近代人或いは都会人の心を癒してくれるもの、変り無いものとして描かれる。しかし果たして有為転変する近代社会に対し自然は常に心の故郷として静かに佇むものなのだろうか。

ワーズワースの自然は彼の詩の中にのみ見ていてはいけない。私自身も嘗て『叙情民謡集』の世界を丹念に読み解く作業をしたとき、その「序文」と『墓碑銘論』¹⁵を頼りにしたが、結果的には逆転の手法を基本にしたパストラル論に落ち着いていた。その後『湖水地方案内』に惹かれ、その「牧人と農夫との共和国」¹⁶ 幻想に取りつかれて、やはり以前と同じ逆転のパストラル論に安住してきたのであるが、J・ベイト（Jonathan Bate）の *Romantic Ecology* を読んで『湖水地方案内』をワーズワースの自然環境論として読み直したとき、自然も又老人像と同じく逆転されねばならないことに気付いたのである。そこで次に『湖水地方案内』を読んで彼の自然像に迫ってみよう。此れは従来のワーズワースの自然を扱った論文に殆ど見られない視点ではなかろうか。だがその前に、同じ湖水地方の一部であるグラスミアを描いた作品「グラスミアの家」“Home At Grasmere”を読んで『案内』にみられる湖水地方の自然と比

較出来るようにしておこう。

III

この詩の成立には複雑な歴史があり、此処数年来 J. ワーズワースを代表とする、いわばオックスフォード学派とでもいわれる人々によって、ワーズワースの作品に対する新しい伝記的研究が始められ、新しい評価が行なわれているのであるが、今はそのことに係わる事無く考察を進めていくことにしよう。

例によって詩人は自分の少年時代の思い出から語り始める。

Once on the brow of yonder Hill I stopped
 While I was yet a School-boy (of what age
 I cannot well remember, but the hour
 I well remember though the year be gone),
 And, with a sudden influx overcome
 A sight of this seclusion, I forgot
 My haste, for hasty had my footsteps been
 As boyish my pursuits; and sighing said,
 'What happy fortune were it here to live!
 And if I thought of dying, if a thought
 Of mortal separation could come in
 With paradise before me, here to die.'

... ..

; here

Should be my home, this Valley be my World.

(1-12, 42-43)

ワーズワースがグラスミアに居を定めたとき(1798)以後に書き始められたであろうこの作品は、当然その背後に彼の当時の心境を潜ませていると考えるべきであろう。98年3月6日 J. W. Tobin に宛てた手紙に「僕はある作品のうち1300行を書き上げた。この詩で僕の持っている知識の全てを伝えようと思う。僕の目的は自然、人間、そして社会の姿を描きだすことなのだ。僕の計画のなかに入らないものは何もないと思う。」(L.84)¹⁷と書いているが、とりわけ彼の注目していたテーマは「今日ではイングランドの北部地方(湖水地方)に殆ど限られているがその辺りに暮らしているクラスの人々の間に見られる日々の心情(domestic affections)

を描くこと」(L. 152)であった。それは何れも社会の底辺で苦しみ、消えていく運命にある人々の状況なのである。当時の湖水地方は「困い込み」によって土地を追われた人々が浮浪者となって往来するところであり、工場労働者という新しい階層が生まれてくる時代であった。

Yes, the Realities of Life--so cold,
So cowardly, so ready to betray,
So stinted in the measure of their grace, (54-56)

だが、と言うべきか、だからこそと言うべきか判らないが、ワーズワースはグラスミアの自然をそのような状況として受け止めていない。

Embrace me, then, ye Hills, and close me in,
Now in the clear and open day I feel
Your guardianship; I take it to my heart;
'Tis like the solemn shelter of the night.

グラスミアの谷間は母のように詩人を抱き込んでくれる。まわりの山々に閉ざされた谷間はエデンの園のように完結した平和の世界である。ジョナサン・ベイトも言うように “Whereas in the city the family is subordinated to the system of getting and spending, in Grasmere the people are ‘embraced’ maternally by the hills around.”¹⁸ なのである。

A blended holiness of earth and sky,
Something that makes this individual Spot,
This small abiding-place of many men,
A termination, and a last retreat,
A Centre, come from wheresoe'er you will,
A Whole without dependence or defect,
Made for itself, and happy in itself,
Perfect Contentment, Unity entire. (163-70)

それは正に閉ざされた庭 (*hortus conclusus*) 以外の何物でもない。たとえ彼がその谷間が「いかなる桃源郷の夢／黄金時代の黄金の空想をも捨て去らせるものだ」(829-30) と唄おうと、詩人にとってこの谷間はあくまでも聖化された谷間であると言わねばなるまい。「桃源郷の夢、黄金時代の黄金の空想」を捨て去らせるものは、その谷間の現実の姿 (*actuality*) ではなく、詩人の心の目に移る真実の姿 (*reality*) なのである。「グラスミアは保養地ではない。現代生活の細切れにされた不安から息抜きする場所ではない。それは実在するユートピアの象徴でもない。それは確固たる代替物である。それは本物の代替物である、なぜなら其処は真の住みかであるからだ。」¹⁹ と K. クローバー (Karl Kroeber) は主張するが、たとえ其処がワーズワースの現実の住みかであるとしても、だからといって聖化されていないということにはならない

だろう。

O Vale of Peace, we are

And must be, with God's will, a happy band. (873-4)

聖化されているからこそ、クローバーも「その谷間では人と自然が相互に浸透し合っているが故に、その“真のコミュニティ”は人間も獣もともに包み込んでいなければならないのである」²⁰と言えるのではないか。ワーズワースは自然を詩で唄い上げる場合、それを聖化し理想化する。だがそれが聖化されればされるほど、それは拮抗物を必要とする。“Michael”と題された牧歌はその典型的な例であろう。グラスミアの村からグリーン・ヘッドの溪谷を、谷川に沿って登ったところに羊飼いのマイケルが、妻のイザベル、息子のルークと一緒に幸福な日々を送っていた。彼らの土地は先祖代々受け継いできたものであり、彼らの生活の技術はどれもみな、父から子に教え継がれてきたものであった。それはこの地方の湖のように、静かに生きてきたものである。その様は『案内』のなかに描かれる湖の説明に繋がるものである。

I shall now speak of the Lakes of this country. . . . it (the lake) least resembles that (the form) of a river. . . . it never assumes the shape of a river, . . . as a body of still water under the influence of no current; reflecting therefore the clouds, the light, and all the imagery of the sky and surrounding hills; expressing also and making visible the changes of the atmosphere, and motions of the lightest breeze, . . . (32)

変化のなかで停止しているような湖の姿は黄金時代の「時」という、ゆったりとした無限の流れのなかで続いてきた「牧人と農夫との完璧な共和国」の姿であり、

the land, which they walked over and tilled, had for more than five hundred years been possessed by men of their name and blood;

(68)

なのであった。友人の保証人となったために、大きな負債を背負っても、その土地は他人に渡すことは出来ない土地なのである。彼は土地を売って負債を払うより、一人息子を異国へ働きに出すことを選ぶ。

if these fields of ours

Should pass into a Stranger's hand, I think

That I could not lie quiet in my grave.

.

.

Our Luke shall leave us, Isabel; the land

Shall not go from us, and it shall be free,

He shall possess it, free as is the wind
That passes over it.

(240-57)

こうしてマイケルの家族はやがて崩壊し、後に残ったのは崩れた石積みの羊小屋だけとなる。土地と共に続いてきたマイケルの家族は土地の故に崩壊する。大地と一体となっていた古い牧歌の世界はこうして近代の経済機構のなかで崩れていかねばならなかった。牧歌の唄えない時代にあつて、牧歌を創作するためには牧歌的世界の崩壊を唄う以外に方法はない。崩壊した牧歌的世界を描き、それを逆転させることによって牧歌の復活を目指したワーズワースは、常に“The tables turned”と我々に語り掛けているのである。崩壊した羊小屋はマイケル一家の牧歌的世界の拮抗物として見事に崩壊している。

『湖水地方案内』もこのワーズワース的カウンター・バランスの構図を基礎としているのである。確かにそれは現実的案内書であるが、同時にワーズワースはそこにも何時もの手管を用意していることを忘れてはならない。

IV

ワーズワースが『案内』を書いた頃イギリスは国内旅行の全盛期を迎えていた。グランド・ツアーでアルプスの険しくも美しい山岳美の崇高さに打たれたイギリスの人々は、湖水地方の景観に崇高美に替るピクチュアレスクという美を見出だしていた。崇高美の持つ広大さ・壮大さに対してピクチュアレスクの美は枠のなかの美であった。人々はクロード・グラスという小型の凸面鏡をポケットに忍ばせて山歩きをした。景色の良いところへ来るとその鏡を取り出し、景色を背にして鏡をかざし、凸面鏡の枠内に納まる変形した風景を愛でるのであった。それは全体の景色ではなく、全体から切り取られた部分の景色なのである。完全な世界でなく、断片の世界なのであった言えよう。ロマン派の詩人たちに「断片」と呼ばれる作品の多いこととも何か繋がりを感じさせる現象である。そのような風潮に対してワーズワースの『案内』はきわめて意識的に反発する。彼はまず湖水地方の景色を鳥瞰する架空の視点を定めることを読者に求める。1790年9月上旬頃スイス旅行の途中に訪れたルツェルンで、アルプス地方の4州にまたがる湖水地方を収めた模型図を見たときの記憶を思い出しながら、イギリスの湖水地方の風景を見る場合「想像の世界で、ある特定の処に身を置くことから始めよう。例えばグレート・グラベルとかスコーフエルといった山の天辺であっても良い、あるいはむしろこれら二つの山の間に懸かる雲を足場にするると仮定するほうが良い。・・・そうすれば我々は足元に多くの谷間が伸びているのが見えるだろう。我々が立っていると仮定するその地点から、まるで車の「こしき」からスポークが広がっているように、八つ以上もの谷が広がっているのだ。」(22)

と書き始める。面白いことに、彼はJ. ウイルキンソン師による湖水地方の美しい風景スケッチ集に、求められて附けた「序文」というかたちで名前を隠して書いた初版(1810)の場合、こういう風には書き出すのであるが、それから十年経った1820年にダドン・ソネット集に付して出版した時は名前も明記されたが同時に、「湖水地方の地誌的解説」(“Topographical Description of the Country of the Lakes”)というそれ自身の表題を付けられることとなる。そして「旅行者に対する指針と情報」と題した序文のような文章を前につけ、初版の時の最初の文章は第二章の位置に置かれることになった。さらにその序文のような文章はまず、著者の第一の願いとして「この案内書或いは手引きは“the Minds of Persons of Taste, and feeling for Landscape”のために準備された」(1)と書き始めるのである。此処に十年間の間にワーズワースの心に生じた大きな変化を見ることが出来る。

初版の場合、ワーズワースがまず念頭に置いたのは全体の鳥瞰図を求めることであり、それはピクチュアレスクという当時流行した概念に対する反発であった。²¹しかし、十年後のワーズワースは当時次々と出版された旅行案内書や、風景美論の姿勢に留まらず、一時的滞在者としての旅行者の立場に限定されることなく、その土地に暮らす人として自然を見る姿勢を取り、政治、社会の全体像をも風景のなかに収めようとする姿勢に拡大されて行く。改訂版の冒頭に掲げられた“the Minds of Persons of Taste”のためという言葉は大きな意味を持っているのである。“taste”という言葉は「趣味」とか「風流心」といった意味ではなく、F. レイノルズ(Frances Reynolds)が言ったごとく、

“Taste seems to be an inherent impulsive tendency of the soul
toward true good, given by nature to all alike.”²²

なのであって、“taste”という言葉は「真に善なる状態に向かおうとする強い性向」というような意味なのである。それは単に真に善なる風景を求めるだけでなく、人、自然、社会、の真に善なる状態を求める人々の心おも意味するのであり、そのような人々の為はこの案内書は書かれたという著者の主張は、我々読者に一つの姿勢を予め求めるものなのである。こういった改版による性格の変化は『抒情民謡集』(Lyrical Ballads)が改版ごとにその性格を変えていったのと同様のものであり、ワーズワースの作品に往々にして見られる興味深い現象である。

「真に善なる状態」とは湖水地方の自然の場合、どのようなことを意味するのであろうか。単なる実用的案内書の域を越えて、我々はワーズワースが求めた真に善なる自然の姿というものをこの『案内』に求めねばならない。

まず我々の注意を惹くのは

“the traveller, when he reaches a spot deservedly of great celebrity, would find it difficult to determine how much of his pleasure is owing to excellence inherent in the landscape itself; and how much to an instantaneous recovery from an

oppression left upon his spirits by the barrenness and desolation through which he has passed.” (27)

という文章であろう。「風景そのもののなかに内在している素晴らしさ」とは「風景そのものの美しさ」と言い換えても良からう。そして「彼が過ごしてきた不毛と荒廃によって彼の心に刻まれた抑圧」とはワーズワースにとってJ. ベイツが言うように、「都会に在ることと、自然のなかに在ることとの違いが核となっていた」²³ とすれば、「今までの都会生活のなかで被ってきた苦しみ」のことと解すべきであろう。湖水地方の美しい自然は、その美しさが与えてくれる喜びだけでなく、抑圧からの開放という喜びも与えてくれるというのである。この視点は諸々の旅行案内には見られぬ視点である。ここには“Home at Grasmere”で読んだ

Embrace me, then, ye Hills, and close me in,
Now in the clear and open day I feel
Your guardianship; . . . (129-31)

という母なる谷間への呼び掛けが木霊している。自然は母であり、

bright and solemn was the sky
That faced us with a passionate welcoming,
And led us to our threshold, to a home
Within a home, . . . (259-62)

“a home within a home”「家のなかの家」なのである。そして家は“ecology”の“eco” = “oiko”でもあることを知れば、自然を知ることはエコロジーを考えることになるのは当然の帰結といえよう。自然をこのような視点から見るとき、自然は風景として見られるだけでなく、生態系というまとまった世界として見られねばならないことになる。其処では人はもはや一時の旅人ではなく、そこに生きる植物や獣たちと同じ存在として自然の一員とならねばならない。

“When the first settlers entered this region . . . they found
it overspread with wood; . . . ; the birds and beasts of prey
reigned over the meeker species; and the *bellum inter omnia*
maintained the balance of Nature in the empire of beasts.” (52)

やがて彼らはそこに棲み付き家を建て、ストーン・ウォールを作り出してその辺りの表情を少し損なうがそれは“a graceful irregularity” (58) と言えるものであった。人間は耕したり植えたりして自然を損なうこともあるが、「自然の営みや自然の力と並立し、役立つものでもあった。」(61) だが、森の木がますます多く切り倒され、その後成長の早い外来種の木が植林されるようになると、森の様子は一変する。長い歴史を生きてきた自然の血の繋がりととも言うべき絆が切れて、コミュニティとしての生態系のまとまりが崩れる。異種族の侵入に対してワーズワースは激しく抵抗するが、それは、「真に善なる状態」とは人工の加わらない状態

であり、永らく「同じ名前と血をひく人々」(68)の所有する世界であり、その限りでの「優雅な混乱」は容認されても、「牧人と農夫との完璧な共和国」への外来種の侵入は許されるべきではなかった。当然ワーズワースにとって湖水地方への鉄道の建設などは激しく排除されねばならないものなのである。

自然に成長してきた森は様々な成長の度合いを持っていて、その様子は決して一様なものではない、しかし、植林は一度に同じ木が植えられることにより、成長も一様になり、多様なたずまいの美しさは無くなる。²⁴ 森の多様な美しさは失われ、一様な世界が現われる。「人工的な植林は自然の美しさに太刀打ちできないのだ」(86) 植林もそうだが、人々の家も自然のなかに溶け込むものでなければならない。家の壁の色も、その土地の土の色と同じようにすることが大切だ。「原則は家もまわりの風景と調和しなければならないということなのだ」(78) それに続けて

“these humble dwellings remind the contemplative spectator of a production of Nature, and may rather be said to have grown than to have been erected; --to have risen, by an instinct of their own, out of the native rock--so little is there in them of formality, such is their wildness and beauty.” (62)

この文章は“Home at Grasmere”の一節を思い出させる。『案内』とこの詩とが深く繋がっていることの証といえよう。

Thou shalt see

A House, which, at small distance, will appear
In no distinction to have passed beyond
Its Fellows, will appear, like them, to have grown
Out of the native Rock; . . . (552-56)

更に、次のような詩行を読むと、

Labour here preserves
His rosy face, a Servant only here
Of the fire-side or of the open field,
A Freeman, therefore sound and unimpaired; (440-44)

その響きが『案内』のなかの

“Towards the head of these Dales was found a perfect Republic of Shepherds and Agriculturists, among whom the plough of each man was confined to the maintenance of his own family, or to the occasional accomodation of his neighbour.” (67)

に木霊しているのが聞こえるようだ。“What man has made of man.”を考えて悲しみに

耽ったことを考えれば、人間が作るものはすべからく生態系 (ecosystem) に合うものでなければならぬということが判る。眞に「原則は簡単だ。何処であれ、自然の心を以て働けば良い」(89) ののである。

しかし現実にはこのような自然が失われていくことを認めねばならない。

An artificial appearance has thus been given to the whole, while infinite varieties of minute beauty have been destroyed. Could not the margin of this noble island be given back to Nature? (72)

新しい階層の人々がこの土地を所有することになる。その上、都会生活の苦しみから逃れて一時の安らぎを求めめるために益々多くの旅人たちがこの地を訪れることになる。自然の手にこの地を戻すことが不可能なことを彼は痛い程確実に知っている。

it is probable that in a few years the country on the margin of the Lakes will fall almost entirely into the possession of gentry either strangers or natives. It is then much to be wished that a better taste should prevail among these new proprietors; . . . (91)

ワーズワースは新しい土地の所有者たちによりよいテイストが広がることを願う以外に道の無いことを知っているのだ。崩壊する生態系は崩壊するマイケルの石積みの羊小屋のように聖域としての「完璧な共和国」の存在を痛感させてくれるであろう。

『湖水地方案内』には彼の詩に唄われているような、聖化された自然もある、だがその一方で彼はしっかりと現実の自然を見詰めている。そして単に自然の尊とさを唄うだけでなく、この一帯を国の所有として生態系を保護するという、今日のナショナル・トラスト運動を先取りした提言を以てこの『案内』を締め括っている。²⁵

ワーズワースの自然は決して唯宗教的な願いを込めた自然、或いは伝統的なパストラルの世界を逆転させた世界、更にはルソー的ユートピアでもない。それは聖化された過去への憧れと、どうしてもなく失われて行く美しい自然と人間の心を見詰める厳しい現実直視の姿勢との間に、辛うじて見られる幻想の自然、完全な生態系を持つ自然、なのである。その幻想を見るためには我々は正しい“Taste”を持たねばならない。それはシェイマス・ヒーニーが言う、「ものの奥を見る」力 (Seeing Things) と同じものかもしれない。そしてワーズワースの言葉で言えば、スランパー (slumber) の状態になることによって初めてその姿を見ることが出来ると言えば良いだろうか。少なくとも、彼の自然はユートピアと見るよりもエコロジーの世界と見るべきであろう。そこには自然、人間、社会の全てが込められているのである。J. ベイトの言葉を以て締め括りしよう

To go back to nature is not to retreat from politics but to take politics into a new domain, the relationship between Love of Nature and Love of Mankind and,

conversely, between the Rights of Man and the Rights of Nature.²⁶

註

- 1) John Williams: "Introduction" to *Wordsworth (New Casebooks)*, ed. J. Williams, Macmillan, 1993) p. 1
- 2) Thomas Hobbes: *Leviathan* 『レバティアサン』(中央公論社: 世界の名著 23巻『ホッブス』) p.160
- 3) John Locke: *Two treatises of Government* 「統治論」(世界の名著 27巻『ジョン・ロック』) p. 203-5
- 4) Joseph Priestley: *Theological and Miscellaneous Works*, Vol. III "Matter and Spirit" (1777)
- 5) Mckillop, A.D.: "Preface to Winter" in *The Background of Thomson's "Seasons"* (Hamden, Archen, 1961)
- 6) Francis Bacon: *The Advancement of Learning* 『学問の進歩』(世界の名著『ベーコン』) p. 252
- 7) A.Pope: *On Man* 『人間論』(平凡社『世界名詩集大成』9巻 イギリス I) (ニ)
- 8) John Williams: "Introduction" *op. cit.*, p. 5
- 9) John Williams: *Ibid.*, p. 6
- 10) Stephen Gill: *William Wordsworth, A Life* (Oxford Lives, 1989) Pp. 139-40
- 11) John Williams: *op. cit.*, p. 11
- 12) Nicholas Roe: "Protest and Poetry 1793-1798: Jacobin Poems?" in *Wordsworth ed.* by J.Williams, *New Casebooks* (Macmillan, 1993) p. 57
- 13) Seamus Heaney: *Preoccupations* (Faber & Faber, 1980, 1990) p. 51
- 14) Seamus Heaney: *Ibid.*, p. 51
- 15) William Wordsworth: "Essays Upon Epitaphs" in *The Prose Works of William Wordsworth ed.* by W. J. B. Owen and J. W. Smyser (Oxford At the Clarendon Press, 1974) Pp.45-119
- 16) "a perfect Republic of Shepherds and Agriculturists" *Guide to the Lakes* Fifth edition 1835 ed. by E. de Selincourt (Oxford, 1970) p. 67 cf. First edition, 1810, p. xvii
- 17) W.Wordsworthの手紙は *The Letters of William and Dorothy Wordsworth ed.* by E. de Selincourt, revised by A.G.Hill (Oxford Clarendon Pr.1988-) による。以下整理番号を引用の末尾に付す。
- 18) Jonathan Bate: *Romantic Ecology* (Routledge, 1991) p. 21
- 19) Karl Kroeber: " 'Home at Grasmere': Ecological Holiness" in *Critical Essays on William Wordsworth ed.*, by George H. Gilpin (G.K.Hall & Co., 1990, reprinted from *PMLA* 89, 1974) p. 182
- 20) : *Ibid.*, p. 183

- 21) Jonathan Bate: *op. cit.*, p. 45

"Where earlier guide writers adopted the picturesque tourist's point of view and rarely descended from their stations, Wordsworth's approach was holistic: he moved from nature to the natives, exploring the relationship between land and inhabitant;"

- 22) Frances Reynolds: *An Enquiry Concerning the Principles of Taste and of the Origin of our Idea of Beauty* (London, MDCCLXXXV, Garland Publishing Inc., 1972) p. 35

- 23) Jonathan Bate: *op. cit.*, p. 21

"For Wordsworth, the distinction between being in the city and being in nature is cardinal;"

- 24) cf. Wordsworth: *Guide*

"Other trees have been introduced within these last fifty years, such as beeches, larches, limes, etc., and plantation of firs, seldom with advantage, and often with great injury to the appearance, of the country;" p. 44

"among the most peaceful subjects of Nature's kingdom, everywhere discord, distraction, and bewilderment! But this deformity, bad as it is, is not so obtrusive as the small patches and large tracts of larch-plantations that are overrunning the hill-sides." p. 84-5

- 25) see *Guide* "In this wish the author will be joined by persons of pure taste throughout the whole island, who, by their visits (often repeated) to the Lakes in the North of England, testify that they deem the district a sort of national property, in which every man has a right and interest who has an eye to perceive and a heart to enjoy." p. 92

- 26) Jonathan Bate: *op. cit.*, p. 33